

翻 訳

社会契約について、または 国家の形態に関するエッセー

(社会契約論初稿) 第一巻第一・二章

ジャン・ジャック・ルソー著
沢 登 佳 人 訳

訳者まえがき

ここに訳出したのは、今日わが国で広く翻訳され読まれているルソーの社会契約論 (*Du Contrat social; ou, Principes du droit politique*) が公刊された一七六二年に先立つ時期に(それが正確にいつかについては様々の意見があるが、ここでは触れない)、ルソー自身の手によって、疑いもなく印刷に付するための最終原稿として、多大の注意を払って清書されたが、何らかの事情で結局は公刊されなかった所の論稿、*Du contrat social ou essai sur la forme de la république* の現存部分

(後半が失われ、残った部分は全体の半分よりやや少ない。一、二巻全部と三巻の最初のこくわずかだけである。)のうち、その冒頭の部分、*Livre I. Premières notions du corps social, Chapitre I. Sujet de cet ouvrage* 及び *Chapitre II. De la société générale du genre humain* の全体である。

この論稿——社会契約論の初稿 (*première version*) と呼ばれている——と、公刊された社会契約論——しばしば決定稿 (*la version définitive*) と呼ばれる——とは、形式および分量の点では大いに違っているものの、思想内容の点で著しく違う所をあまり持たない。なるほど、全体としてみれば、決定稿は教科書タイプで客観的叙述に心がけ取りすました感じがし——拙訳が底本とした J.-J. Rousseau, *Oeuvres Complètes*, Tome III *Du contrat Social, Ecrits politiques*, Bibliothèque de la pléiade, Édition Gallimard, 1964 の初稿に対する解説を書いた Robert Derathé の言葉を借りると、「決定稿に対して著者は教育的な概論の客観性 (*l'objectivité d'un traité didactique*) を与えようと欲していた。」——、要點筆記的で部分間の論理的つながりが緊密を欠く。これに對し初稿は、著者の思考過程をそのまま言葉にしたように、フレッシュで生き生きした思念が

活躍しており、ルソー独特のきめ細かく息の長いしつような論理を容易に追うことができる。ルソー論稿収集の功労者 C. F. Vaughan は、その編集にかかる The political writings of Jean Jacques Rousseau, Vol. I, 1915 (拙訳ではその注記を参照。)中の説明で、「初稿には決定稿に比べより健康でより緊密でもある見解が見られる。」「動揺が少ない。」「理論に不純な諸要素を入れていない」また「オリジナルな構想のより鮮明な見取図が生き残っている」と述べている。しかしながら、全体を通じてまたそれぞれの項目において言わんとする所に本質的な差異は認められない。

ところが、これには二つだけ例外がある。その一つは、De la religion civil の項であって、初稿でははっきりと、ローマ教会を攻撃しプロテスタンティズムを讃美しているのに、決定稿にはそれがなく、客観的な教科書的叙述に終始している。(もつとも、この項のみは紙背にながり書きしてあって、紙表の清書稿が出版されないと決まった後に、次の稿のために荒筋を書き留めておいたものらしい。)そしてもう一つは、ここに訳出した初稿の第二章に相当するものが、決定稿には全く存在しない、ということである。

しかるにこの第二章こそ、ルソーの政治・社会思想の真髓であり魂である所の一般意思そのものに対する、今日見られるルソー全著作中恐らく唯一の、直接的なまとまった説明であり概念規定であって、従って一般意思の政治・社会哲学にはかならない社会契約論全篇の基礎理論なのである。それゆえ、初稿がこれを冒頭に置いたことはまことに当を得ていたと言うべきで、これを熟読してから爾余の議論を読むと、初稿決定稿ともたいへんよくわかる仕掛けになっている。

ところが決定稿は、前記のごとく他の部分の論旨・構成の大筋を変えないまま、何らかの理由で——この理由が何だったかについては後で触れる——大切なこの部分をそっくり削除してしまったから、当然のなりゆきとして、全篇を貫く中心概念たるこの一般意思が、そもそも何であるのかという、最も基礎的な事がらがあいまいになってしまい、読者は、一般意思の概念規定がわからぬまま、一般意思をめぐる具体的個別的な問題を説明されることになる。そこで首をひねりながら、逆に後者の説明から前者の概念規定をいわば手さぐりで推測することになるが、そこに当然、読者自身の思想の個性と力量との如何によって、様々な推測が成立しうることになる。

周知のごとく、社会契約論の思想特にその中心をなす一般意思の觀念については、右は全体主義的と見るものから左は人民民主主義的と見るものまで、ほとんどあらゆる種類の解釈が試みられており、そうなった理由の一半は、すべて偉大な思想の持つ多角性、総合性、全体性そして弁証法的性格に在るが——初稿第二章はルソーの思考の弁証法的性格が遺憾なく發揮されている点でも、全著作中の白眉である——、もう一半は正にここに在ったと言えることができる。

たとえば、全体主義者のルソー像は、一般意思が特殊意思の総和を超過しているということを、現実の人間意思に対して超越的な存在であるという意味にとることから生じる。他方、これを誤解だときめつけてルソーを生粋の民主主義者自由主義者と解する立場に立つて考えると、一般意思は、階級的不正によって分裂している人間——正にルソーはそのことを強調してやまなかった——に平等と統一とを与えるという窮極目標に到るための手段として、ルソーが考案した政治機構を、理論的に基礎づけるための、純然たる論理的要請から考案された、少なくとも直接には現実に根拠を持たない一種のフィクション（作業仮説）だということになる。社会契約論が構成した国家像は現

実に根拠を持たぬユートピアだという、伝統的な、今日なお有力な見解はそこから来るのであって、たとえば手近な例として平凡社版世界大百科事典初版の一般意思の項における福田歓一の解説には、「一般意思を通説的用語として△国民の総意▽と解釈することは……近代国家がルソーの国家のように同質的でないために正しいとはいえない」と在るが、歴史的に同質的国家などただの一度も存在したことはないし将来も存在しないであろうから、結局ルソーの国家は在りえない空想のユートピアだということになる。しかしまた人間の自由は、その個性の多様性すなわち創造性に在るのだから、同質的国家の中には自由はないわけで、そうするとルソーのユートピアは、結局、個人の自由なき全体主義国家、洗脳社会だったということになるのだろうか。それでは福田がせっかく、右の項で、一般意思の全体主義的解釈は、「ルソーの強調した自由の精神と相いれない」と述べたことを、自分で裏切る結果となろう。

わたくし自身決定稿のみを通じて長い間ルソーの真意をつかみかね、正直に申してその令名にもかかわらずわけのわからぬ本だなあと思っていた。後、初稿第二章を読んで初めて釈然たるものがあつた。そこにおいてルソーは、例のズバリ人間性の

現実の底に透徹するたぐい稀な本質直観を、見事な弁証法論理の駆使によって鮮明に表出し、その中に、一般意思を特殊意思との緊密な弁証法的結合の關係において鮮やかに措定しているのであって、これによれば、一般意思が、超越者でもなく、単なるフィクションでもなく、また単なる規範的存在でもなく、正に現実の個々人の現実的思想・情意の中に、あるいはその隠れた動因として、あるいは顕在的に働くその活動様式として、日常茶飯時々刻々不斷に現存する所の、現実の個々人の行為に対する弁証法的規定の一要素にはかならないことは、ほとんど一点の疑義をさしはさむ余地もない。全貌は読んでのお楽しみとして、単にその中の次のような二、三言をとってみただけでも、すでにそのことは明らかである。ルソーは書いている、「一般意思が、各個人における、人間は自分の同類に何を強制しうるか、そして彼の同類は彼に何を強制する権利を有するかに關して推理する所の、悟性の純粹な行為である」ということは、何びともこれを否定しないであろう。」それではそのような悟性の推理とは、具体的にはどんな内容のものかというのと、たとえば「自分の存在と幸福とを、自分の同類と分かち合うことによって、何倍にも増やすことを学び取ること。」「見か

けの利益よりも、十分に考慮された利益の方を好むことを学ぶこと。」である、と。つまり、目先の小利だけを追い求める粗野な利益欲求が特殊意思であるのに対し、小利追求を抑えて人に譲ることを通じてかえって結果的に大利を得ることを求める洗練された利益欲求が一般意思なのである。特殊意思を抑えることが一般意思を可能にするという点では両意思は矛盾・対立するが、利益欲求たることには変わりがなく、ただ後者は前者よりも発展し洗練された利益欲求であると言うにすぎない。ルソーが「悪を懲やすべき業を惡そのものから引き出すように努力する」と言っているのは、つまりそのことである。そしてその意味で、「公共の善惡（すなわち一般意思）は個々の善惡（すなわち特殊意思）の総和より大きい」と言われるのである。こゝろわかつてみれば、一般意思とは平々凡々、われわれが日常生活の中で法や道德に背いて自分の欲求（特殊意思）を充たしたいという衝動を感じる度毎に、それを抑えるために自分に言い聞かせる価値判断、「目先は損のようでも、みんなが我慢して法や道德に従っていれば、みんなの協力によってみんなが勝手に行動するよりも遙かにたっぷり利益を生産し分配し享受することが可能になり、自分にとっても結局は得だから、こゝこ

は一番辛抱しよう。」ということにすぎない。超越もフィクションも入り込む余地はないのである。

それゆえ、社会契約論においてルソーが意図した所は、人間が社会を作り営む気持の底には、いつでもこのような意思が働いていたはずなのに、今の社会はどうもその意思がすなおに貫徹されておらず不平等が甚しいから、これを改めるために、まず、この意思に最も忠実に社会を構成して行けばどんなことになるかを考えてみよう、というに在ったのである。言いかえれば、社会契約論の全構想は、かような現実の個々人の行為の本質的要因としての一般意思が、もう一つの要因たる特殊意思との弁証法的従って必然的に動的な関わりの下に、自己の内的必然に従ってすなわち自由な創造力の行使により、国家社会を形成してゆく具体的現実的動的な、自由な創造の筋道の輪廓を示すに在ったのである。初稿冒頭の第一章で、「社会体の性質をよく定義することから始めて、社会体の最善の諸関係を明瞭に定義づけることこそ、この著作の中でわたくしがしようと試みた事だ。」と述べているのは、正にこの謂いである。ルソーはこの構想の大体を成功裏に実現した。だからこそそれは、現実に対して無力なユートピア論ではなくて、フランス革命という、

正に個々人の創造的自由が最高限に發揮され結集された真の歴史的現実の、まぎれもなく最も中心的な最も強力な最も説得力ある指導原理となりえたのである。

同じ見地から、ルソーは自然法論者だったのか、それとも実定法・実定権力を流動する具体的国民の意思の上に基礎づけた反自然法論者だったのかの論争に対しても、初稿第二章は根本的な解決のヒントを提供してくれるであろう。ルソーは確かに自然法を自然状態の法として示すロックの自然法概念に反対した。また、非時間的非場所的な静的規範または超越的規範としての自然法にも反対した。しかし彼は、現実の個々人の特殊な時間特殊な場所における日常茶飯時々刻々の活動のうちに常に本質的に働く悟性の内的必然だという意味で、真に普遍的な動的内在的規範たる所の自然法の存在を確認し、これを一般意思と名づけ、一般意思すなわち自然法の表現として実定法・実定権力を具体的に形成する手続の在るべき姿を追求して、遂に社会契約論が展開する民主主義的政治機構の構想に到達し、このような機構を通じて定立される実定法・実定権力のみが、その妥当性・正当性の根拠を一般意思としての自然法の中に持ちうることを示したのである。

この意味でルソーは、古代、中世法を基礎づけたギリシア、ローマ、キリスト教思想の伝統的な自然法概念を超越する、近代法の基礎たるに真にふさわしい近代自然法思想の完成者だった、と言いうる。ホッブス、ロック流の説明技巧という意味で形式的な自然法理念のみによつては、長い伝統に培かれ歴史的社会的に深い意味を盛り込まれた古代中世の内容充実せる自然法理念を、具体的に克服する道を発見することは不可能だったのであつて、ルソーの動的弁証法的構成的という意味で実質的な自然法理念により、初めて、近代史近代社会の全く新たな具体的内容を創造する原理としての、近代的自然法が完成されたのである。わたくしの専攻たる刑法学に結びつけて言え

ば、このことは、社会契約違反または自然法違反およびそれへの制裁として扱えられた、近代刑法上の犯罪刑罰概念の原型を理解する上で、極めて重要であるが、これについてはいずれ別の論文で考察したいと思つてゐる。

以上のわたくしの論断に対し、訳してわずか十一頁のこの小論から、どうしてルソー観の全体に関わるそのような重大な結論を引き出しうるのかと疑う読者には、とにかくこの小論を読むことをお願いする。少なくともこの小論は、わたくしが多年

にわたつて抱いていた、ルソー観に関する疑義を一挙に解決してくれたと同時に、わたくしの現在の直接関心事たる近代民主主義とそれを支える国民の総意の意義の問いなおしに、重要なヒントを与えてくれた、とわたくしには思われる。

この初稿の存在はわが国でも、もちろん、ルソー研究、フランス政治思想史研究の専門家の間では広く知られているが、わが学界の実情として、多くの社会科学研究者は、依然決定稿のみから社会契約論の全概念を得ているために、案外これを読む前のわたくしと相似た理解の困難さを感じているやもしれぬ。流布している邦訳もすべて決定稿のみについてのものであるが、せめて初稿第二章の訳だけでも併載し、これを併読することによつて決定稿の理解に便する配慮が望ましい。しかし今にわかにそれを期待できぬ以上（わが学界の通弊として専門家はど批判を恐れてか専門分野の翻訳をおいそれとはしない傾向がある）、わたくしのごとき門外漢が、わたくしより遙かに適任の訳者が登場するまでの間、しばらくその空白を埋めることは、単に許されるというだけでなく、学界（ルソーを専門研究分野とする方面を除く）に寄与すべきいささかの意義を有しよう。こう考えて不学を顧みず、あえて拙訳を試みた次第であ

る。

なお、この重要な章がなにゆえ決定稿で削除されたかについても諸説あるが、前記 Robert Dearné が説く所の、「百科全書」の《自然法 (Droit naturel)》の項の批判でもある所のこの章の論争的 (polemique) な性格^①が、もともと論争を好まぬ性格のルソーに、公表は待てよと思わせた、という理由が、最も^②に近いと思われる。訳文に注記してあるごとく、ディドゥロの当てこすりに頭に來たルソーは、この章を書いて皮肉たっぷりに反論してはみたものの、月日がたつて冷静になるに従い、大ボスと正面衝突することの不利なるを思い、カットするに至ったのであろう。一読して感じられるように、この章は、舌鋒の鋭さと現実扶摘の適確さ・徹底性およびしつこさにおいて、ルソーの全文章中の白眉であり、仮に直接には百科辞典の執筆者というような特定の誰かを指していないかったとしても、日頃そこに指摘された現実を糊塗する綺麗事の中にどっぷりつかって暮らしている多数の読者に対しては、昔も今も変わらず、あたかもかさぶたを引っ掻かれ神経を逆撫でされたような不快感、いやらしさの感情、ディドゥロの言葉を借りれば「首を締め (étouffer)」たい気持を与えずにはおかないであろう。

うことは、間違いない。De la religion civil の項における明白なカトリック攻撃・プロテスタント讃美と一緒に、この章全体を削除した方が、確かにルソーの保身には好都合だったであろうが、その代償として同時代や後世の広汎な読者に対し、種々の重大な無理解や誤解の種を彼自身の手でまく結果となった。ともあれ、後日本人自身が公刊に恐れた程の卒直・露骨な文章とあれば、取りすました教科書的な決定稿に比べ、ルソーの本音が遙かに卒直・明白に吐露されているわけで、その意味だけからでも、本章はルソー思想理解のためにぜひ読まねばならぬ文献の一つである。

拙訳では、訳者の主観と好みとが入らざるをえない意訳を排してひたすら直訳に努め、一語一語も、文章構造も、できる限り原文をなぞることを期して、たとえば名詞代名詞の単数複数の区別もできるだけ明示し、代名詞も何を受けているかまぎれない場合を除きできるだけそれが受けている所の元の語句を反覆し、名詞代名詞関係代名詞の格および動詞の能動受動の別もできる限り原文を踏襲することに努めた結果、日本語としては甚だ読みづらいものとなったが、ルソーの文章は、芸術家肌の繊細な神経、すばらしい直観力が把えたものの忠実な表現を

訳 文

第一巻 社会体 (corps social) の最初の諸観念

第一章 この著述の主題

志して、細部に工夫が在るとともに、全体の構成の仕方で微妙なニュアンスを表わしている、という点に特徴があるから、意訳ではその所を十分に把ええないと思つて、あえてそう試みた。しかし語学力と表現能力との不足により思つたような成果を獲られなかったばかりでなく、恐らく思わざる誤訳もある。有能な読者の教示叱正をお願いする次第である。

訳文中()内の字句は、訳語に相当する原語を示すもの(なぞり方がわかるように方々に入れた。)、訳文の意味をとり易くする目的で訳者が補つた原文にはない文句、または訳者による訳語の意味の補充説明のいずれかである。また①②③④は訳文の後の訳注を指示する番号である。

なお、*De la religion civil* を含む爾余の部分についても、できればおりを見て少しづつ本誌上に訳出したいと思つてはいるが、言うまでもなく最も好ましいのは、語学力、表現能力およびルソー研究の蘊蓄においてわたくしより遙かに優れた方々による、初稿全体の完訳およびゆきとどいた解説が出版されることである。

多くの高名な著述家たちが統治の諸モットーと市民法の諸規則とについて論じて来たので、この主題について語るのに役立つ事がらで、これまでに言われなかった事は、何一つないほどである。けれども恐らく人はいつそう(次のことに)賛成だろうが、もしも人が社会体の性質をもつとよく定義することから始めたならば、多分社会体の最善の諸関係がもつと明瞭に定義づけられたであろうに。これこそわたくしがこの著作の中でしようとした事である。それゆえここで問題なのは、社会体の管理(*administration*)では全くなくて、その構造(*constitution*)なのである。わたくしは社会体を生きさせて、しかも作動させることはしない。わたくしは社会体の諸センマイと諸部品とを描写し、それらをそれらの場所にセットする。わたくしはその機械を作動しうる状態に置く。他のもつと賢い人たちが、その動きを規制するであらう。

第二章 人類の一般社会 (La société générale)

について

政治組織 (institution politiques) の必要性がどこから生じるかを探究することから始めよう。人間の力はその自然の諸欲望 (besoins) とその原初的な (primitif) 状態とに比例しているから、この状態が少しずつ変わり、この諸欲望が少しずつ増大するにつれて、自分の同類たちの協力 (l'assistance) が人間に必要なようになってくる。そして遂にその諸欲求 (desirs) が全自然を包み込むに至れば、全人類 (tout le genre humain) の協力 (le concours) が辛うじてその諸欲求を満たすに足りるのである。かようにして、われわれを悪性な (méchants) ものにする所の正に同じ諸原因が、われわれをさらに奴隷 (esclaves) にし、そしてわれわれを墮落させつつわれわれを奴隷化する (asservissent) のである。われわれの弱さの感覚 (le sentiment de notre faiblesse) は、われわれの本性 (notre nature) からよりもむしろわれわれの貧欲から来る。すなわち、われわれの諸情熱 (nos passions) がわれわれを引き離すにつれて、われわれの諸欲望はわれわれを近づけ、われわれがわれわれの同類

たち (nos semblables) の敵になればなるほど、われわれはわれわれの同類たち無しにすまることができなくなる。一般社会の最初の諸紐帯 (liens) とはこのようなものである。その必要性が認められるやその必要性がその感情 (le sentiment) を窒息させるように見える所の、そして各人がそれを耕すことを義務づけられることが無ければその果実を集めたいと思うであろう所の、普遍的な友愛 (bienveillance) の諸基礎とは、このようなものである。なぜなら、性質が同じだということ (l'identité de nature) は、友愛においては、その効果が全くないからであって、効果がないわけは、性質が同じだということとは人間たちにとって団結の理由であると同じくらい争いの理由であり、人間たちの間によい理解と調和とを置くのと同じくらいいしばしば競争と嫉妬とを置くからである。

諸事物のこの新しい秩序から、尺度なしに規則なしに安定性なしに、諸関係の諸群が生まれる。そして人間たちは、その諸関係を固定すべく働く一人一人に対し百人がそれら(諸関係を破壊すべく働くことにより、不断にそれらを変質させ、かつ変化させる。そして、自然状態 (l'état de nature) における人間の相対的 (relative) 生存は、不断の流れの中に在る所の千

も他の諸關係に依存しているので、人間は決して、自分の人生の二つの瞬間の間を通じて同一のものであることを確實なものとしえない。平和と幸福とは人間にとって、一瞬の閃光ではない。これらの移り変わりすべてから生じる所の惨めさのほかに、何ものも恒久的ではない。人間の諸感情(sentiments)と諸概念(idées)とが、秩序への愛と徳についての崇高な諸概念(notions)とにまで自らを高めうるであろう時には、彼(人間)に善(Le bien)も悪(Le mal)も、正直な人間も性惡な人間も、見分けることを許さないであろう所の諸事物の状態の中で、彼の諸原理(秩序への愛と徳の諸概念と)の確實な適用をなすことは、永遠に不可能であるだろうに。

われわれの相互的な欲望がそれを生み出しうるような一般社会は、それゆえ、惨めな境遇に陥った人間に対して有効な援助をひとかけられも供与しない。または少なくとも一般社会は、新しい諸力を、それをすでにたつぷり持っている人にしか与えず、これに反して群集の中で落伍し望みさせられ押しつぶされた弱者は、避難するいかなるアジールも、彼の弱さに対するいかなる支えも見出さず、そして結局は彼が自己の幸福をそれから期待していた欺瞞的な結合(union)の犠牲者として死ぬ。

人間たちを、欲する諸紐帯によって互いに結合するように導く諸動機の中には、一致点に関わるようなものは何もないというところ、各人がそこから自分の幸福を引き出しうる所の共通幸福(félicité commune)という目的を目指すどころか、一人の幸福(Le bonheur)は他の人の不幸を作るということを、もしも人がひとたび納得するならば、そしてすべての人を一般利益(bien général)に差し向ける代わりに、すべての人が一般利益から遠ざかるがゆえにのみ彼らは互いに接近するのだということを、もしも人が結局見てとるならば、たとえかような状態が存在しうるとしても、その各々が自分の利益(intérêt)しか見ず、自分の傾向にしか従わず、自分の感情にしか耳を傾けない所の人間たちにとって、その状態は罪と悲惨との源泉ではないということをもまた、人は感じとるべきである。

かように、自然の甘い声はもはやわれわれにとって無謬の導き手ではなく、われわれが自然から受け取った独立も望ましい状態ではない。平和と無垢とは、われわれがその無上の楽しみを味わう前に、永遠にわれわれから逃れ去った。最初の諸時代の馬鹿な人間たちには気づかれず、後の諸時代の知慧づいた人間たちからは逃れ去って、黄金時代の幸福な生活は、あるいは

人類 (*la race humaine*) がその状態を享受しえた時にはその価値を知らなかったがために、あるいは人類がその状態を知りえたであろう時にはそれを失ってしまったがために、人類には常に無縁の状態であった。

そればかりではない。この完全な独立とこの規律なき自由とは、たとえそれが古代の無垢 (*Pantique innocence*) と結合したままであり続けたとしても、常に一つの本質的な、そしてわれわれの最も優れた諸能力の進歩に有害な欠点 (*vice*)、すなわち全体を構成する諸部分のつながりの欠如を持ったであろうに。地球はその間にほとんどいかなるコミュニケーションも存在しない所の人間たちによって覆われるであろうに。われわれはいかなる点によっても結合されることなしに、いくつかの点で接触し合うであろうに。各人は他の人たちの間にひとりぼっちでとどまるであろうに。各人は自分のことしか考えないであろうに。われわれの悟性 (*entendement*) は発展しえないであろうに。われわれは何も感じるることなしに生きるであろうに。われわれは生きていたことなしに死ぬであろうに。われわれのすべての幸福はわれわれの惨めさを知らないことに在るだろうに。われわれの心には善良さ (*Bonté*) もなく、われわれの行

動 (*actions*) には道徳性 (*moralité*) もないであろうに。そして、われわれはただの一度も、徳を愛すること (*l'amour de la vertu*) である所の魂の最も微妙な感情を味ったことがないであろうに。

「人類 (*genre humain*)」という語が、精神に対して、人類を構成している諸個人の間にかなる現実の結合も要しない所の、純粹に集合的な一観念しか呈供しないことは、確かである。そこへさらに次のことを付け加えよう、もしも人がこのような仮定 (*cette Supposition*) を欲するならば。すなわち人類を、それ(後の精神的人格を指す。)に個性 (*l'individualité*) を与え、そしてそれ(精神的人格)を一つに構成する所の共通存在の感情 (*un sentiment d'existence commune*) と一緒に、一般的なそして全体に関わる目的のために各部分を活動させる所の普遍的な動機 (*un mobile universel*) を持った、精神的人格 (*une personne morale*) だと想像しよう。この共通感情は人間性 (*l'humanité*) の感情であり、そして自然の法 (*la loi naturelle*) は機械全体の活動原理であると想像しよう。(こう想像した上で) 次に、自分と自分の同類との関係において、人間のその構造から何が結果として生じるかを観察しよう。そう

すれば、われわれが仮定した事がらとは全く逆に、われわれは、社会の進歩が個人の利益を眼醒めさせることによって人間性を（人々の）心の中で窒息させること、そして、むしろ理性の法則と呼ぶべきであろう所の自然の法（la Loi naturelle）についての諸観念（les notions）は、諸情熱（passions）のそれに先立つ発展が自然の法のすべての掟を無力化する時にしか、発展を開始しないことを、発見するであろう。このことを通して人は、自然によって書き取られたと自称するこの社会協定（ce prétendu traité social dicté par la nature）は全くの空想であるということを見てとる。なぜなら、その協定の諸条件は常に知られていないかまたは充足しえないものであり、そして（人間は）必然的にそれらの条件に無知であるかまたは違反するかせざるをえないからである。

もしも一般社会が哲学者たちの体系の中とは別の所に存在するとすれば、わたくしがすでにそのことを述べたように、それは、ちょうど化合物がそれを構成する諸要素のどれからも引き出せない特徴を持っているのと同じように、それ（一般社会）を構成する個々の存在の性質から区別される固有の性質を持つであろう所の、精神的な存在（un Être moral）であ

るだろう。自然がすべての人間たちに教えるであろう所の、そして人間たち相互のコミュニケーションの最初の道具であるだろう所の、一つの普遍的な言語が存在するであろう。すなわち、諸部分すべての通信に役立つであろう所の一種の共通の感覚中枢が存在するであろう。公共の善または悪（le bien ou le mal public）は、単に単純な集合におけるごとく個々の善または悪の総和であるにとどまらず、それらを結合する所のつながり（la liaison）の中に存在するであろう。それ（公共の善または悪）はこの（個々の善または悪の）総和より大きいであろう。そして公共の福祉（la félicité publique）は個々人の幸福の上に打ち樹てられるどころか、公共の福祉こそ個々人の幸福の源泉であるであろう。

独立の状態（l'état d'indépendance）においては、理性がわれわれを、われわれ自身の利益（notre propre intérêt）の見地から共通利益（bien commun）に向かって協力一致するように導いてくれるというのは、いつわりである。個別的利益が一般利益と調和するどころか、事物の自然な秩序の中では両者は互いに排除し合い、そして社会の法（les lois sociales）は、各人が他の人たちに対してはきちんと課せようとするが、しかし

自分自身に課せられることを欲しない所の一つの軛である。

「わたくしは人類 (*l'espèce humaine*) のまっただ中に恐怖と紛擾とをもたらすような気がする。」と、賢い人が窒息させる所の独立の人 (*l'homme indépendant que le sage étouffe*) が云う。「しかしわたくしは、自ら不幸であるか、それとも他の人たちの不幸を作るかのいずれかたらざるをえない。そして何びともわたくしにとってわたくし以上に大切ではない。」「それは無駄なことだ。」と彼はつけ加えるだろう、「わたくしが自分の利益を他人の利益と和解させようとすることは。あなた (賢い人) が社会の法の諸利益についてわたくしに語る所の事がらは、善いものでありうるだろうよ、もしもわたくしが小心翼翼々として他の人たちに対してその法を遵守するのに対し、他の人たちがすべてわたくしに対してその法を遵守してくれることが、わたくしに確信できるならば。しかし、そのことについてあなたは一体、どんな確実性をわたくしに与えることができるのか。(できないでしょう。)そしてわたくしの立場は、わたくしより強い人たちがわたくしにしようと欲する所のすべての諸害悪にわたくしが身をさらされているのを見ながら、しかもわたくしより弱い人たちからはあえてそのうめ合わせを求めな

い、ということ以上に、悪くありうるのか。(それ以上悪いことではないでしょう。わたくしは最悪の立場に置かれるでしょう。) わたくしに、(他の人たちのわたくしに対する) あらゆる不正な企てに対する保証を与えるか、それとも今度はわたくしの方から(他の人たちに対する) 不正な企てを差しひかえることを期待しないか、のいずれかにしてくれ。あなたはわたくしに向かって、自然の法がわたくしに課する所の諸義務を拒否すればわたくしは同時に自然の法の諸権利を放棄することになる、そしてわたくしの諸暴力は人がわたくしに対して行使しようとする所のあらゆる暴力を正当化することになるだろう、と無難に言うことができる。わたくしは、如何にしてわたくしの穩健さがわたくしを暴力から守りうるのが全然わからないだけ、ますます喜んであなたの言葉に同意する。さらにまた、弱い人たちから剥ぎ取ったものを強い人たちと分け合うことにより、強い人たちを自分の利益のために利用することが、わたくしの仕事であるだろう。それはわたくしの利益のために、そしてわたくしの安全のために、正義なんかより優れた価値があるだろう。」見識ある独立の人が以前かように推理した (*eut raisonnée*) ということの証拠は、自分の行動を自分自身

にしか報告しない所のすべての至高な社会（国家のこと）が、（現実）かように推理しているということである。

人が道徳の助けに宗教をつれて来て、人間たちの社会をまとめるために直接神の意思を導入させようと欲しないとすれば、かような議論に対してきっぱりと何を答えるか。（答えることはできない。きっぱり答えるには神の意思を持ち出さねばならぬ。）しかし、賢い人たちの神についての崇高な諸観念、神がわれわれに課する所の友愛（*la fraternité*）の甘い声々、神がわれわれに望む真の礼拝である所の純潔な魂の社会的な諸徳（*les vertus sociales*）は、常に大衆から逃れ去るであらう。

人は常に大衆に、大衆が自己の名誉をかけて千もの恐るべき破壊的な情熱に身を捧げるために、軽微な諸安楽を犠牲としてそれに献げる所の、大衆と同じように無分別な神々を、作ってやるであらう。もしも哲学と諸法とが（*la Philosophie et les loix*）狂信の諸狂熱を抑えないならば、そして人間たちの声が神々の声よりも強くないならば、全地球は血で溢れるであらうに、そして人類はアツという間に滅び去るであらうに。

事実、もしも偉大な存在（*Grand Être*）および自然の法についての諸観念がすべての人々の心の中で生得的なものであった

なら、その両方ともを明示的に教え込むことは、全く余計な気づかいであった。それはわれわれがすでに知っていることをわれわれに教えるようなものであって、人がそうしたやり方は、実は、むしろわれわれをしてそれを忘れしめるのにずっと適していた。またもしそのような（生得的な）諸観念が存在しないとすれば、神が彼に対してそのような観念をひとかけらも与えなかった所のすべての人々は、そのような観念を知ることを見除される。そしてそれを知るために特殊な諸教育が必要となった瞬間から、各民族（*chaque Peuple*）は、人が彼に対してそれのみが善き観念であることを証明する所の自分自身の（神および自然の法についての）観念を持つ。そしてそこから協調と平和とよりもっとしばしば、虐殺（*le Carnage*）と（諸々の）殺人とが流出する。

それゆえに、その使用が犯罪を減らしうるのと同じくらい多くの犯罪を、その濫用が生ぜしめる所の、様々の宗教の神聖な諸掟は、除けておくことにしよう。そして、神学者が未だかつて人類を害するようにしか扱ったことのない問題の吟味を、哲学者の手に返すことにしよう。

しかしながら前者（哲学者）はわたくしを、決定することが彼

だけの仕事である所の人類そのものの前へと、送り返すであろう、なぜなら、すべての善の中で最も大きな善（*le plus grand bien de tous*）は、人類が持っているたった一つの情熱であるから。彼（哲学者）はわたくしに言うであろう、自分がどこまで人間であり、市民であり、臣であり、父であり、子であるべきか、そして自分には何時生きて何時死ぬことが適当であるかを知るために、個人が問い合わせるべきであるのは、一般意思（*la volonté générale*）にである、と。「白状するがわたくしは、正にそこ（一般意思）において、わたくしが相談しうる所の規範（*la règle*）を見る。しかしわたくしはまだ」とわれわれの（前出の）独立の人は言うであろう。「それが」わたくしをこの規範に服従させるべき所の理由を見ない。正義とは何であるかをわたくしに教えてくれることが問題なのではない。正義であることによってわたくしがいかなる利益を持つかを、わたくしに示してくれることが問題なのだ。」と。事実、一般意思が、各個人における（*dans chaque individu*）人間は自分の同類に何を強制しうるか、そして彼の同類は彼に何を強制する権利を有するかに關して諸情熱の沈黙の中で推理する所の、悟性の純粹な行為（*un acte pur de l'entendement*）であるとい

うことは、何びともこれを否定しないであろう。しかし、かように自分を自分自身から区別しうる人間がどこにいるか、そして、もしも人間の自己保存についての配慮が自然の第一の掟であるとすれば、人間がそれと自分の個別的な構造（*constitution*）との関連をつゆほども見出さない所の諸義務を自分に課せられんがために、かように種（人類 *l'espèce*）一般を重要視することを、人間に対して強要できるのか。上のような異論はどのような場合にでも在るものではないのか、そして、人間の個人的な（*personnel*）利益が、どのようにして人間が一般意思に服従することを強制するのは、まだわかっていないのではないか。

さらに、かように自分の諸観念を一般化する技術は人間の悟性の最もむずかしいそして最も暇のかかる働きの一つであるから、大多数の人間たちは、この推理の仕方で彼の行動の諸規則を引き出すことが、いつかできるようになるであろうか。そして個々の行動に關して一般意思に相談しなければならぬ場合に、その規則に關したまたはその適用に關し間違ふこと、および法に服従しようと考へながら自分の傾向にしか従わないといふことが、何度も善意の人間に起こらないであろうか。（起こ

る。) しかれば彼 (人間) は誤りから身を守るために何をするだろうか。彼は内心の声に耳を傾けるだろうか。しかしこの声は、と人は言う、社会のただ中でそして社会の諸法に従って判断し感ずる慣習によってしか、形成されない。それゆえその声は社会の諸法を打ち樹てるのには役に立ちえない。そしてさらに、(内心の声に耳を傾けるためには、) 意識よりも声高に語り、意識のためらいがちな声を覆い隠し、そして哲学者たちはこの声は存在しないのだと主張させる所の、諸情熱のいかなるものをも、彼 (人間) の心の中にかき立てないことが、必要であつただろうに。彼は書かれた法 (*droit écrit*)、全諸民族の社会的な諸行動 (*les actions sociales*)、人類の正に敵たる者ども^③の暗黙の諸慣習 (*les conventions tacites des ennemis mêmes du genre humain*) に相談するのだろうか。最初の困難が常に帰って来る。そしてわれわれが、自分の想像する秩序についての諸観念を引き出すのは、われわれの間で打ち樹てられた社会秩序からだけである。われわれは、われわれの個々の社会によって一般社会を想像する。小さな国家 (*Republiques*) の建設がわれわれに大きな国家を想像させる、そしてわれわれは市民であつた後にのみ、本来的に人間となり始める。そのこ

とを通じて、人類に対する自分たちの愛によって祖国に対する自分たちの愛を正当化しながら、何びとをも愛さない権利を持つために全世界を愛することを誇る所の、自称世界主義者たち (*Cosmopolites*) のことを、どう考えるべきかがわかる。

推理がこの点でわれわれに論証する所の事がらは、事実によって完全に確証される。そして人が少しずつ太古の諸時代にさかのぼるにつれて、自然法 (*droit naturel*) および人間たち全部に共通の友愛 (*la fraternité*) についての健全な諸観念が、かなり後になつて流布され、そして世界の中で極めてゆつくりした歩みをなしたので、その諸観念を十分に一般化したものはキリスト教しかなかったということが、たやすくわかる。さらに人はユスチニアヌスの諸法の中にさえ、単に敵と宣言された者に対してだけでなく、帝国に従属していなかったすべての者に対して、旧式の諸暴力が多くの点で許されていたのを見出す。まるでローマ人の人間性が彼らの支配を超えて遠くまではひろがらなかったように。

事実人は長い間、グロチウスが観察しているように、外国人たちそしてなかんづくバルバルたちを、彼らを奴隷の身分に落とすまで、盗み、掠奪し、虐待することが許されると信じて

いた。人が見知らぬ人たちに對して、彼らの氣を悪くさせることなしに、あなた方はもしや強盜さん（Brigands）か海賊さん（Pirates）ではありませんか、どうですか、と尋ねた、というのはそこから来る。なぜならその職業は、当時は不名誉であるどころか名誉あるものとみなされていたから。強盜たちと闘ったヘラクレスやテセウスのような初期の英雄たちは、自分自身は強盜を働くことをやめなかった。そしてギリシア人はしばしば、全く交戦状態にない民族との間に結ばれた条約をも、平和条約と呼んでいた。外国人という語と敵という語とは、長い間多くの古代民族の間では、ローマ人の間でさえ、同義語であった。キケロは言っている、「なぜなら、われわれの先祖にとって、敵（hostis）とみなされていた人は、今や異邦人（peregrinum）とわれわれは言う。」と。ホッブスの誤りは、それゆえ、独立の、そして社交的（social）になった人間たちの間に戦争状態を設定したことでなく、この状態を種（人類）に自然なもの（naturel à l'espèce）と仮定したこと、およびその状態をその状態がその結果である所の諸欠点（vices）の（逆に）原因として与えたことである。

しかしながら、人間たちの間に自然的かつ一般的な社会が全

く存在しなくても、人間たちが社交的になることによって不幸にそして悪性になるとしても、正義と平等についての諸法は自然状態（l'état de nature）の自由の中に生きる人たちにとつても社会状態（l'état social）の諸必要に服従して生きる人たちにとつても何ものでもないとしても、われわれにとっては徳（vertu）もなく幸福もない、そして天（le ciel）はわれわれを対策なしに種の荒廃に委ねた、と考えるどころか、悪（mal）を癒やすべきである所の業を惡そのものから引き出すように努力しよう。新しい諸結合（associations）によって、もしそれが可能なら、一般的な結合の欠陥を矯正しよう。われわれの荒っぽい話し相手（前出独立の人）が自分自身でその首尾（la suite）を判断してくれましように^④。始められた技術（l'art commencé）が自然に對してなした所の諸惡のつぐないを、完成された技術（l'art perfectionné）の中で、彼（独立の人）に示そう。彼が幸福だと信じていた状態のあらゆる惨めさ、彼が確かだと信じていた推理のあらゆる誤りを、彼に示そう。彼が諸事物のより善い構成（une meilleure constitution de choses）の中に善い諸行動の価値、悪い諸行動の処罰、および正義と幸福との好ましい調和を見出しますように。彼の理性を新しい

(諸々の) 光で照らし、彼の心を新らしい(諸々の) 感情で熱しよう。そうして彼が、彼の存在と彼の幸福 (*son être et sa félicité*) とを、それら (存在と幸福と) を彼の同類たちと分かち合うことによって、何倍にも増やすことを学び取りますように。もしもわたくしの熱心さがこの企てにおいてわたくしを盲目にしないならば、強い魂と正しい分別 (*un sens droit*) とによりこの人類の敵が遂には彼の (諸々の) 誤りと一緒に彼の憎しみを放棄することを、彼を迷わしていた所の理性が彼を再び人間性につれもどすことを、彼が彼の見かけの利益よりも彼の十分に考慮された利益の方を好むことを学ぶことを、彼が善良で、有徳で、考え深く (*sensible*) なり、そして一言で言えば、遂に、彼がそれであることを欲していた所の癡猛な強盗さんから、よく秩序づけられた社会の最も強固な支柱へと転成することを、つゆほども疑わないようにしよう。

訳注

① この文は、百科全書 (*Encyclopédie*) の自然法 (*Droit naturel*) の項から引用されている。本章の以下の文章はこの項の著者ディドロへの長文の返答であると推測され

る。よって、独立の人とは暗にルソー自身を指し、賢い人とは暗にディドロを指すと思われる。

② 賢い人 (ディドロ) がなぜ独立の人 (ルソー) を窒息させるのかは、前記 *Droit naturel* § V. の次の文を読めばわかる。「*Que répondons-nous donc à notre raisonneur violent, avant que de l'étouffer?*」(彼を窒息させる前に、一体全体われわれは、われわれの乱暴な推論者に対して何を答えるか?)」

③ 誰を指しているのかわかりにくい言葉だが、この章の末尾において明らかに独立の人を指して「この人類の敵が」と言っているのと照応して、自然状態の中で独立して自由に生活している人々を指しており、したがって彼らの暗黙の諸慣習とは、自然状態の中で自然発生的に生まれ育ち定着した諸慣習を指しているのではないか、と思われる。

④ この文中の語 *notre violent interlocuteur* (荒っぽい話し相手) は、注②所引文中の *notre raisonneur violent* に対応し、この文全体は、ディドロが「何を答えるか?」と言ったのに対し、答えてくれなくて結構、「自分自身で判断する」さ、とやり返したものであると思われる。